

ブルゴーニュの20世紀を振り返る

ロマネ・コンティをめぐるド・ヴィレーヌ家とルロワ家

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1938年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。
95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン
関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・
デュ・タートヴァン(利き酒師)叙任。現在佐多商会ヴィ
タリテ事業部に籍。

20世紀を振り返りますと、この100年の間に、我が国における食生活は大きく変わりました。同時にアルコール飲料についても、日本古来のお酒に加えて、ビール、ウイスキー、そしてカクテルといった洋風な飲み物が今世紀前半から飲まれ始めました。しかしワインは、それが人類にとって一番古い飲み物であるにもかかわらず、日本人の生活には縁のないものとして、あまり関心が持たれませんでした。日本でワインという文化的な洋酒が理解され、少しずつ普及されるには、1970年代まで待たなくてはなりません。ずいぶんと遅れたものです。それが今では、ワインの持つ幅広い多様性を、時、場所、目的、一緒に食べる食事等によって変わるヴァリエーションを楽しむ人々が、非常に多く増えています。しかし、我々消費者がワインを買い求め、栓を抜きグラスに注いで楽しい一時を過ごせるまでには、ワイン生産者の大変な苦労と努力があってこそ実現するものです。ブルゴーニュで今日、他のワイン産地ではまねのできない優れたワインの数々を、世に出すワイン生産者ド・ヴィレーヌ家とルロワ家についてご紹介しましょう。

ドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティ(DRC)

先ずロマネ・コンティについて説明しましょう。この畑はコート・ド・ニュイのヴォヌ村にある、特級の格付けを持つ畑です。ヴォヌ村は、北のヴージュ村と、南にニュイ・サン・ジョルジュの町のそれぞれ有名なワイン産地の間に位置しています。1.8ヘクタールの広さで、毎年約7000本前後(1996年は6101本)の赤ワインを生産しています。この畑でのぶどう栽培の歴史は古く、西暦1232年にシトー派の修道院によって始められたと伝えられています。しかし畑の名称ロマネ・コンティは、1760年からこの畑を所有したコンティ大公(Prince de Conti)の名に由来します。その後、1795年に売却され、何人かの手を経て、1869年にデュヴォー・プロチエ家(M. Duvault Blochet)が買い取り所有することになります。1906年にその子孫との婚姻で遺産を相続したド・ヴィレーヌ家が現在50%の株を所有しています。そして第二次大戦中の1942年にオーセイ・デュレス村に本拠地を持つワイン仲買商、メゾン・ルロワのアンリが50%の株を取得し、経

営に参加しました。それ以来、両家を代表する二名での共同経営で運営されています。現在はドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティ(DRCと省略される)の社名で、ロマネ・コンティ(モノポール)と、他にラ・ターシュ、(モノポール)、リシュブール、ロマネ・サン・ヴィヴァン、グラン・エシェゾー、エシェゾー、ル・モンラシェ、パタール・モンラシェの各グラン・クリュに畑を所有し、その資産価値の大きさは計り知れません。特にフランス国にとって、ロマネ・コンティの畑の重要性は、パリのルーヴル美術館やノートルダム寺院等の国家的遺産と同様に評価されています。まさにお金では買えない、並みはずれた資産といえます。

さて、1945年に不幸な第二次大戦が終わった後、数年間ブルゴーニュ地方のワイン生産者は、戦争中の人手不足やぶどう栽培に必要な色々な物資の欠乏で荒れた畑の修復に苦労をします。DRCも例外ではありません。当時のロマネ・コンティの土壌は、手入れ不足から疲弊していました。加えてぶどうの樹齢は古過ぎて(50〜60年)果実があまりつかず、生産性が非常に悪くなっていました。そこで1946年から1951年にかけて、思いきった、ぶどうの樹の植え替えが行われました。その結果、DRCはその名声を取り戻していきます。それを実現させたのは、戦争中の1942年にDRCの株を取得し、経営に参加したアンリ・ルロワが、自身の持つ豊かな資金をつぎ込み、家業であるメゾン・ルロワの経営を疎かにしてまでDRCの経営を優先させ、その復旧に情熱を燃やした功績があったからだと考えられています。

その後、1950年からド・ヴィレーヌ家の代表をつとめたアンリ・ド・ヴィレーヌの引退により、その息子オーベルと、同じくアンリ・ルロワの次女のラルーが、二人で両家を代表して対等な立場での共同経営者として、協力していくこととなります。ちょうどその頃、いわゆる世界的なワインブームで特に最高の評価を得ているロマネ・コンティの価値は、うなぎ登りに高くなりました。しかし二人のワインに対する考え方、DRCの経営についての意見の相違等が、両者の関係をだんだんと険悪なものにしていきます。ついに1992年1月、DRCの株主総会がもたれ、採決によって、ラルーが18年間たずさわった経営からは

ずされることになります。代わってアンリ・ルロワの長女で、DRCの株25%を相続しているラルーの姉ポーリーヌ・ロシェの次男アンリが新しくルロワ家を代表して共同経営者の一人となり、オーベル・ド・ヴィレーヌとDRCの経営に責任を持つこととなります。それを機会に、日本での総代理店も高島屋からサントリーへと変わったのです。

オーベル・ド・ヴィレーヌ(Aubert de Villaine)

オーベル・ド・ヴィレーヌは1939年生まれです。彼が生まれてすぐに第二次大戦が起こり、父親のアンリは軍隊にとられ、後にドイツ軍の捕虜となります。従って、彼の父親の記憶は戦争が終わり、アンリが復員した5才の時からです。当時、彼の家族はブルゴーニュから西に120キロ離れたムーラン(Moulin)に住み、父は土地の銀行に勤め、家族を養っていました。その頃はたどろまね・コンティのオーナーでも、ワイン生産だけでは食べていけなかったのです。そしてアンリは1950年に、彼の父親でありDRCの共同経営者であったオーベルの祖父エドモン・ド・ヴィレーヌ(Edmond de Villaine)の後を継ぎDRCの経営にたずさわることになります。一方オーベルは13才まで土曜日の学校に通い、父のバリの近所で寮生活をしながら大学に進みます。大学ではギリシャ語、文学そして最後に法律を学びます。卒業後、アメリカに渡りニューヨークの有力なワイン商の紹介で、カリフォルニアのアムゲダンのぶどう園で1年と4か月を過ごします。その頃はまだまだ知られていなかったカリフォルニア・ワインが、現在のように有名になり始めた頃のこと、活気あふれるナバ・ヴァレーのワイナリーでの貴重な体験は彼の人生での非常に幸福な一時期でもあったと、今でも懐かく回想しています。

さて、オーベルとDRCとの関係は常に近いものでしたが、彼がそこで働くことと決心したのは、アメリカから帰国した後の1965年からのことです。最初の3年間、彼は主に畑とカーヴでのワイン作りの仕事を分担し、同時にメゾン・ルロワでワイン取引(Negociant)の実際を学びました。1969年、彼は商用でアメリカを旅行しました。その際、後に彼の一生の伴侶となるアメリカ人女性ベラ・フェアバックスと出会い、1971年にヴォヌ村で式を挙げ、結婚することになるのです。



オペール・ド・ヴィレーヌ氏と佐多社長
D.R.C.のカークにて



ラルー・ベーズ＝ルロワ女史と佐多社長
D.R.C.のカークにて



ロマネ・コンティの26世紀前半のヴィンテージワイン
(1918～1938)の残り少ない貴重な在庫

結婚を機会に夫妻は南のコート・シャロネーズの町シャニーに近いブーズロン村に、ワインセラー付きの古い農家と付属するぶどう園を買い、新しい住まいとします。そこでオペールは遺産として引き継いだDRCとは別に、彼と妻であるパメラとで独自の新しいドメヌを始め、最高級赤ワイン、ロマネ・コンティとはまったく違う、大衆的な白ワイン用の品種アリゴテの栽培を始めます。その後、ぶどう畑を買い足したり、あるいは賃貸契約で広げ、事業は順調に伸びていきます。その間、彼はブーズロン産のアリゴテ品種から作られるワインと、他の産地で作られる同じアリゴテ種ワインとの違いに気付きます。明らかにブーズロン産は一風独特な良さがあるのです。そこで彼は、当時アリゴテが例えどの産地で作られようと単にブルゴーニュ・アリゴテという原産地呼称でしか売れなかったのを、ブーズロン産のアリゴテに独自のアペラシオンを獲得するために運動を始めます。そして1979年に新しくブルゴーニュ・アリゴテ・ド・ブーズロンとして独立した原産地呼称証明をラベルに明記することに成功するのです。これは自分の作るワインの品質に対しての揺るぎない自信が評価されての格上げで、素晴らしいことだと思います。彼のA&P・ド・ヴィレーヌ社はアリゴテ以外にも、ピノ・ノワール種から優れた赤ワインと珍しいロゼを市場に出しています。同時に彼の温厚で忍耐強い紳士的な人柄は、同業者たちからも厚い信望を得ています。

アリゴテ種はブルゴーニュ産の白ワイン用のぶどうとしては、シャルドネ種に次いで第2位の地位にあります。決して高級ワインの扱いを受けず、販売価格も日常ワインとして2000円前後で買えます。この品種は収穫量が多く果実は早く成熟し、日照の良い年は、快い酸味で食欲をそそる軽快なワインを生み出します。瓶詰めされた後は向上するような熟成はありえませんが、常にボジレーの様に、若い内に消費するのが上手な飲み方です。ブルゴーニュ風食前酒キールを作るのに一番適しています。またクロ・ド・ヴージュでのシュヴァリエの定例大晩餐会では大抵食卓でこのワインが一番最初にサービスされます。

ラルー・ベーズ＝ルロワ (Lalou Bize-Leroy)

メゾン・ルロワの当主ラルー・ベーズ＝ルロワは1933年にアンリ・ルロワの次女として生まれました。メゾン・ルロワは1868年にアンリの祖父フランソワが、オーセイ・デュレスでワインの仲買商として事業を起こしたことから始まります。商売は主に若い高級なワインを買い取り、自社のカーヴで樽熟し、メゾン・ルロワのラベルで売ることでした。事業は確実に伸び拡大しました。そしてアンリの代の1919年からは、更にブランデーの混合酒などの輸出が成功して資産を大きくし、1942年にはDRC社の株50%を取得することができたのです。

その後、DRCの経営も軌道に乗った1980年、アンリ・ルロワは86才で惜しまれながら亡くなり、彼が残したDRCの株は二人の娘が相続しました。従って現在DRCの株はアンリの長女ポーリーヌと次女ルルーが25%ずつ持っていることになりました。同時にラルーはDRCの共同経営者として、オペール・ド・ヴィレーヌと同格の立場で18年間活躍することになります。

さてラルーは3才の頃から父親のそばでワインに接し、ワインの香りや味見が大好きでした。成長してソルボンヌ大学で学び、ドイツ語を専攻し、他にラテン語、ギリシャ語も得意でした。ここで彼女の生い立ちや現在の人柄を語るのに欠かせないのが、彼女の趣味の山登りのことです。ロッククライミングが大好きで、一流のアルピニストとしても評価されています。適齢期を迎え求婚者が多い中、岩登りの出来ない人とは結婚しないと、親の反対を押しきり、スイス人のスキー選手で登山家のマルセル・ベーズ氏 (Marcel Bize) と結婚し、一時アンリを失望させます。ラルーが家業のワイン取り引きに最初関係したのは1955年23才のことです。この時、彼女はメゾン・ルロワの共同経営者としてワイン部門の責任者となります。その頃のメゾン・ルロワは社長の父アンリがDRCの経営にかかりつきで、家業のルロワ社にはあまり力を入れないで、そんなことから任されたルロワ社の実情はかなりお粗末でした。それを一流のドメヌにしようと、岩登りにかけたと同じ焼くつような情熱をそそぎました。その頃、彼女はワインテイスティングの練習に朝8時にカーヴに入り、夕方5時まで100種類ものワインを試飲したといひます。彼女は「ワイン作りの哲学は

山登りに似ている。境界との挑戦である」と言っています。

1988年、ラルーはDRCの経営、ワインの販売に従事する一方、同じヴォーヌ村に存在するドメヌ・シャルル・ノエラを買収します。そしてこのドメヌが所有するすぐれた畑の数々を手に入れます。それをメゾン・ルロワとは別に、ドメヌ・ルロワと名付け、新しい会社を設立し、同時に、ぶどうの栽培をバイオダイナミ農法に切り替えています。日頃から「ぶどう栽培は土壌が一番大事、そして厳しい剪定、量より質」といった彼女の理念を実行に移します。その様にして作られたワインは試飲され、その結果ドメヌ・ルロワのワインは異議なく今日のブルゴーニュの最も輝くスターだと評価されました。しかしこの理想のワイン製法は、当然、他のドメヌと比べると生産量が著しく少なくなり、その分、売値に響いてきます。そこで彼女のワインの品質が高い評判を得たのに嫉妬する競争相手たちは、その値段を「天文学的価格」と言い、マダム・トロ・シェール (英語で Mrs. Too Expensive の意味) とあだ名までされます。しかし彼女は言います「私はワインをギフトのように振り撒き与えてしまうことはできません。そしてきっぱり「最高の品質にはどんな値段も高過ぎることはありません」と。ドメヌ・ルロワが所有する特級畑はシャンベルタン、ラトリシエール・シャンベルタン、クロ・ド・ラ・ロッシュ、ミュジニエ、クロ・ド・ヴージュ、リシュブル、ロマネ・サン・ヴィヴァン、ゴルトン・ルナルド、ゴルトン・シャルルマニエです。他にドメヌ・ドーブネ (Domaine D'Auvenay) を所有。

オペール・ド・ヴィレーヌの言葉

「今日の午後、私は林檎を食べました。それは大変美味しい林檎でした。そこで私は悟ったのです。我々に与えられた恵みで粗悪な産物を作り出すことは、罪悪である。それは自然に対しての尊敬を失うことになるからです。」

「現在のブルゴーニュの豊かさは最初修道士たちによってもたらされたものです。我々ブルゴーニュ人は、彼らによって培われたものを、大事に保持し続けなくてはなりません。そのことを自覚している人々が充分な数にいると思います。この土地は結局継承され存続していくための土地なのです。」

「ブルゴーニュには、何か神々しさ(素晴らしい)が潜んでいます。そう思いませんか?」